

## 「さよならラッキー」

(2016)

2016年7月26日、薄明かりの早朝5時、いつもならもう少し早い時間3～4時頃、ラッキーの小さな鳴き声で起「され、夜の庭に連れ出しておしつこ」をさせるのだが、この日はそういうよりも遅かった。いつもの様に暑い夏の間は、洗面所の洗濯機の前の冷たいタイルの床で体を伸ばして寝たままで、僕の気配に気が付いていないようなので、指に水を濡らせ口元に持つてゆくが全く反応がない、エッ?・・まさかとは思ったが体を触つてみると既に硬直していた。



さてそれからが大変だ。連日猛暑の真夏、この亡骸をどうするか、この場合に備えてずっと以前から、亡骸の対処法、葬儀・火葬の候補地・・・等は一応ネットで調査済ではあったが。まず亡骸は倉庫にあるダンボー

ル箱を色々当てがつてみたが、横向きの体から伸びた両手・両足が意外と長く、1番大きなダンボール箱を横にし、上面が開くように加工した即席柩とした。底にクッション用ビニール材を敷き、ドライアイスがあればいいのだけど急には手に入らず、大型のアイスノンを幾つか敷いた。そして最後に、妻が、庭に咲いている花々（紫陽花、百合、ダリヤ等）を切ってきて体に覆い、遺品（首輪、いつも噛んで遊んでいたクマのぬ意ぐるみ）、写真・等々を入れ、「きれいなラッキーの棺が完成した。そこで火葬場だが、最近ペット専門の葬祭の多さに付け込み、結構悪質の業者も増えてきている様だが、以前偶々友人の紹介もあつた下関のお寺が良さそうだと思つた。ネットでのHP・ブログなどを調べてみても、古い仏教寺院で、元々浄土宗（總本山知恩院）のお寺だそうで、創建以来430年の歴史と伝統を誇っていて、犬猫好きの住職が35年頃からペット葬祭も始めたという立派なお寺のようなので、早速電話をしてみた。早朝から僕も焦っていたので、早いとは思ったが朝6時に、次に7時に電話してみたが繋がらない・・・そしてやつと8時過ぎに繋がつたが、その日は予約も多かつたようだが、「宇部から車で1時間かけて行く！」と言つたからかどうか知らないが、何とか10時半の予約に入らせてもらつた。ラッキーの常日頃の「可愛さと、行いの良さ」に感謝。猛暑の中、何とかその日の午前中には小さな骨壺に納める事が出来た。

総額3・1万円+妻の要望でお位牌を+1・5万円で特注。

思い起<sup>レ</sup>せば13年前、僕が定年を迎える单身赴任寮を出て、久しぶりに我が家に帰り、同時に東京で娘と息子を育てていた妻にも「ちらの家に帰つてもらい、老夫婦二人きりの生活が始まる」となつたが、趣味も性格も全く違う二人が朝から晩まで一つ屋根の下で暮らすというのが想像できず、早速犬を飼い始めた。4ヶ月のキャバリアで、ラッキーと名付けた。

思い起<sup>レ</sup>せば「数日の間は、食が全く進まず、フードをミルしてジエル状にし、注射器で口の中に注入していたが、その量たるや微々たるもので、いすれは・・と覚悟はしていたのだが、遂に最後の体力も尽きたのだろう。

ひと月位前から、朝夕の食事がどうも進まなくなつた、何よりも食べ事が一番と思い、少し甘みのある「コンデンス・ミルク」を混ぜたり、「ビタミン入りの粉ミルク」や「缶詰の療養食」・・あれやこれやの工夫をし。何とか食事をさせたが、今までの量に比べればかなり減つてきているのは事実であり、心配は尽きない。食事だけではなく、夜中（3時頃）どんな苦しみがあるのか分からぬが、小さな吠え声を発するので、妻と僕とで交代交代で起きなければならぬ。何も喋つてくれないので・・・

「悩み犬」

散步

犬連れて ブーツの美女に目礼す  
桜花散る 風に向かいて犬を引く  
犬連れて今朝は神社で初日待つ

犬と行く 未明の森の百千鳥

早起きの犬に引かれて初詣

曙の大縁陰に犬と入る

こち

犬と行くいつもの東風の通り道  
初鳴きに犬も首振る杜の朝  
草萌えの野を行く犬に引かれつ  
犬と行く植田の朝の明かりかな  
野水仙犬のいつもの休憩所

あ

さんき

犬と吾と霧の山氣の中にあり  
犬連れて霞む山氣を持ち帰る  
春の風犬に従い裏小道



寒風を避ける裏道犬も知る

犬を引く帰りはいつも女坂

犬と行く初夏の森なり女坂

犬と行く小路を塞ぐ落ち椿

犬連れの仲間と叔姫分かち合う

みち

山桃の降り積もる徑犬と行く

いばら

犬と行く暗き路の辺花菱

犬と行く初日の見ゆる丘に出る

下萌えの清しき朝を犬と行く

背伸びして犬の目覚める海明かり

下萌えにあたま瀧らす犬とゆく

くく

えごの花毀れし中を犬と行く

犬をひく小道溢れしえごの花

犬連れの今日の道草董見る

どんぐり

すみれ

団栗の落ちる音して犬跳ねる  
犬と行く朝霧の海 街灯り  
稻光り 人の後ろを犬歩く  
春雷に 主人蹴飛ばし犬走る  
犬連れの朝のわが道青き踏む  
雪しまき大樹の下に犬と吾  
黄落の恵みや犬に曳かれ行く  
朝未だき 犬と踏み行く椿道

芝生の犬

しゆんびん

愛犬の野生俊敏 蝶を追う

とんば

ひたすらに蜻蛉の影追う庭の犬  
草むしる妻の傍ら犬も居る  
冬の庭犬の目動き鳥動く

愛犬の春の悩みや首傾ぐ

かし

悩み犬



犬遊ぶ芝に色鳥遊びけり  
犬の歩に鳥は動かず芝実く  
若葉越し 我が家の犬と話す人  
春日濃き 芝生の犬が横になる  
陽溜まりに薄目開いて大伏せる  
爆睡の犬が尾を振る春の昼  
犬が呼び通りの客は梅を見る  
初雪の庭の明るさ犬目覚む  
夏蝶の影追うばかり犬猛る

春の陽に上目使いの悩み犬

のどか

から

長閑さや愛犬脚に絡みつく

眠り犬 眼は人を追う春深し

いびき

鼾かく犬 膝に乗せ余寒かな

よさむ

目ヤニして主人を凝視 春の犬

春昼夜寝 添い寝の犬が脛舐める

すが

かな

ふゆひなた

愛犬の縋る目哀し冬日向

花の雨 愛犬膝に来て眠る

こび

永き日や愛犬目覚め媚を売る

梅雨晴れや昼夜の犬とショパン聴く

たたみか

豈搔く 犬に起こされ寒の朝

ぶ

梅雨曇り 妻不機嫌に犬を打つ

雪明り 犬に起こされ雪まろげ

犬の顔 人に似てきし秋灯下

はんげあめ

叱られて傷舐める犬 半夏雨

甘噛みす 犬に忠あり春の風



眼の潤む犬の哀しみ夏の暮れ

う  
る

老い二人 しばしの昼寝 犬も寝る  
遠吠えの消え行くところ冬銀河

け  
だ  
もの

冬深し獸臭う膝の犬

ぬ  
く

温もりを犬と分け合う藤寝椅子

焼き芋で犬とひととき母と嫁  
起き抜けの犬のノックや春嵐

目ヤニして犬の嘆きや年新た

妻の編む毛糸の先に犬遊ぶ

毛糸編む妻の傍ら犬眠る

春の果て犬の悩みを聞き分けむ  
日盛りに犬も怒りを忘れたり

待つことを憶えて犬も老いに入る

昼夜寝覚犬絨毯に顔擦る

+

こす

夕餉には犬が擦り寄る父の傍

去勢せぬ犬の幸せ春深む

犬と聞く深夜ラジオの夜長かな

かお

人の貌して犬眠る籐寝椅子

しばら

熱帯夜犬暫くは人の貌

熱帯夜夢見る犬の涙跡

犬の目に冬の夜の夢の涙跡

かげ

父母想う翳りもありぬ夏の犬

鳥眺め犬毅然たり目借時

め

夏兆す犬の眸しばし親想う

垣根越し主人も犬もそぞろ寒

無聊なる犬鳴くばかり花の雲  
訴える犬の荒息春の果て

木枯しは犬も襲わん犬吼える  
人の膝求めて夜寒 部屋の犬  
木枯しに主人従え 犬吼える

家の犬 妻に懐かず年終わる  
首捻り股間をしゃぶる春の犬

犬の眼の瞬き止まる春雷

花冷えや犬舐め廻す父の足  
花散れば日がな花追う犬なりし  
機嫌良き犬のねまりや春日中  
我座る椅子の温みに犬寝まる  
主人いて犬無防備の春昼寝  
笑顔無き犬や寂しき目の冷ゆる



囁りに犬の目動く静けさや

ケーキ舐め犬も今夜はクリスマス

チキン食う犬に聖夜の希いあり

ねが

父の匂いしきりに追いて犬走る

大久伸して春の犬寝まり入る

四温晴れ犬は腹見せ寝まりけり

夕立雲犬いとけなき手を拳ぐる

炎夏の犬機嫌よく舌丸め

犬の椅子も運びて一族夏夕餉

ぶりよう

今朝秋の無聊の犬の手肢伸ぶ

令羽着る犬に卯の花薦し降る

かづば

春愁い 震災悼も涙犬

いた

秋深し上目使いの悩み犬